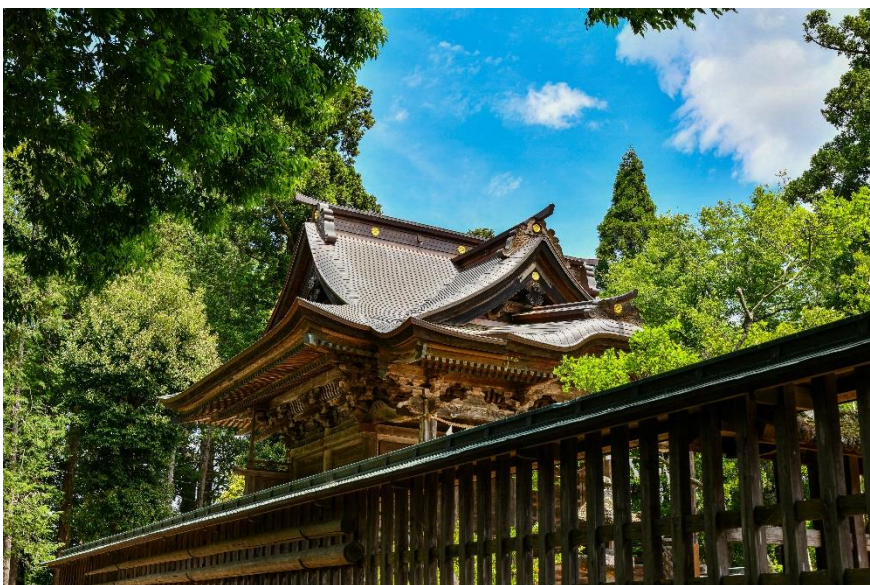


令和五年度

伊達市民憲章

作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたって

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて七百三点の応募がありました。自らの体験をもとに、地域との関わりを通して得られた絆の大切さや、ふるさとの伝統文化に対する想いなど、まっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました審査委員の皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目次

作品集発行にあたって

伊達市長

須田 博行

1

小学生の部

【最優秀賞】

笑顔でつながる伊達なまち

保原小学校

六年

小林

璃久

7

【優秀賞】

つないでいきたい「大切な絆」

伊達小学校

六年

小林

愛理

8

思いやりをつないで

大田小学校

六年

長沢

健太

9

【優良賞】

地域活動を通して考えたつながり

伊達小学校

五年

池田

芽生

10

私の町をつなぐためには

栗野小学校

六年

菊池

ひまり

11

つないでいこうこの響き

保原小学校

五年

浦山

慶介

12

世代を超えた絆

掛田小学校 五年 大橋 里玖

13

【佳作】

ぼくが守りたいもの

伊達東小学校 五年 斎藤 悠生

14

文化とのふれあい

伊達東小学校 六年 小宮 結衣

15

ひいじいちゃんの運転免許

大田小学校 五年 加藤 桜子

16

祭りでつながる世代の絆

月舘学園小学校 六年 大河内瑞希

17

中学生の部

【最優秀賞】

育ててもらった町

月舘学園中学校 三年 高木梨央南

21

【優秀賞】

これからの世代を繋げるために

伊達中学校 二年 数又 南

22

伊達市民の思いを胸に心を紡ぐ

霊山中学校 三年 森藤 音羽

23

【優良賞】

健幸都市伊達市をめざして
盆踊りと大條太鼓
めざせ！夢実現都市伊達市
より良い伊達市にするために

【佳作】

小さな行動から
地域活動で心一つに
地域の盛り上げ役として
高齢者体験で意識するようになったこと

講評

伊達市民憲章

梁川中学校 一年	鈴木里依咲	24
梁川中学校 三年	佐々木美空	25
月舘学園中学校 一年	関根 明莉	26
月舘学園中学校 二年	齋藤 大智	27
伊達中学校 一年	佐藤 恵	28
梁川中学校 二年	八巻 碧	29
松陽中学校 三年	佐藤 空道	30
霊山中学校 一年	齋藤 楽歩	31
審査委員長	二瓶 洋允	32
伊達市民憲章		34



小学生の部

最優秀賞

笑顔でつながる伊達なまち

保原小学校 六年 小林 璃久

ぼくの家には毎月「だて市政だより」が届きます。伊達市に住む人なら目にすることがあるのではないのでしょうか。ぼくの父は今年度の町内会班長として近所の家に回覧板や市政だよりを配付したり、クリーンアップ作戦に参加したりと地域のために活動しています。ぼくも隣の家に回覧板を届ける手伝いをしています。その時に近所の人達にもあいさつをするようにしています。少しでも協力することで地域の人達とつながり、安心して暮らせるのではないかと思うからです。

「だて市政だより」は、伊達市の行政や市民のさまざまな活動を発信し、がんばっている人達を応援する広報紙です。インターネットを通してソーシャルメディアによる情報発信もしているので、より多くの人とつながり、交流することができます。ぼくはこの市政だよりを読んで「こども食堂」という場所があることを知りました。こども食堂は、一人暮らしの人や子育て中の人など、こどもから大人まで誰でも気軽に利用できる場所です。現在、市内には九カ所あります。それぞれ月一回から二回、地域の皆さんがボランティアで美味しい料理を振る舞ってくれます。夏休みになったらぜひ、そのこども食堂に行きたいと思い、家族みんなで保原町にある「てらこやしよくどう」へ行きました。

仙林寺というお寺にその「てらこやしよくどう」があります。ここではボランティアのおじさんやおばさんが作ってくれたランチをごちそうになりました。とても暑い日でしたが、日陰での食事だったので風が気持ちよく、そうめんや天ぷら、キュウリの漬物を地域の人達と一緒に食べました。地元を取れたての新鮮な野菜を使った天ぷらは、揚げたてでとても美味しかったです。

「もつとおかわりしていいよ。」

とボランティアの方に声をかけられ、喜んで食べました。食後にピンポン玉すくいもやり、夏祭りのような感じで過ごせました。

市内で最初にこども食堂を立ち上げたのは佐藤恵子さんという方です。

さとうけいこ

佐藤さんは、

「今、社会の中で足りないものは、地域のつながりです。昔と比べて地域のつながりが希薄になり、そのような地域は災害の時に亡くなる方が多い。コロナで更に人と人の間が離れてしまった気がしている。」

と危機感を訴えています。こうした思いから家庭でも学校でもない第三の居場所が必要と考え、こども食堂を立ち上げたそうです。ぼくもこの四年間、コロナで家族や友達以外の人と関わる機会が少なくなり、家で過ごす時間は不安で寂しかったです。環境や人間関係の変化はあるけれど、人と人との触れ合いやつながりがあるから幸せを感じるのだなと感じました。これからは地域の一員として、いろいろな活動に参加し、笑顔であふれる明るい伊達なまち作りを目指したいです。

優秀賞

つないでいきたい「大切な絆」

伊達小学校 六年 小林 愛理

「おはよう。」

私の一日は、家族全員にこの言葉をかけることから始まる。そして、学校に行く時、

「行ってきます。」

と、私が言うのと、

「いってらっしゃい。」

と、母は毎朝玄関先まで見送ってくれる。私は、母の笑顔とぬくもりある声に背中をおされ、毎日元気に登校する。

私の学校は、集団登校だ。集合場所から学校までは、約十分のきよりだ。

班の集合場所に着くと、同じ班で登校する様々な学年の人たちに混ざり、友達のお父さんもいる。友達のお父さんは朝の忙しい中、途中まで、私達といっしょに毎日欠かさず通学路を歩いてくださっている。歩道がない道路を歩くのだが、自動車や自転車も通るため気を付けなければならない。友達のお父さんは、

「車が来ているよ。気を付けて。」

と、温かい声をかけてくださる。私達が安全で、また安心して登校できるように、いっしょに歩きながら見守ってください。少し歩いて行くと、

「おはよう。がんばってね。」

などと、毎朝声をかけてくださるおばさんがいる。おばさんの自宅のそばで、毎日私達が登校することを見守ってください。いつもニコニコとおだやかな笑顔に、私は毎日心が温かくなる。

また少し歩き学校に近づいてくると、交差点がある。細い道路で信号はないが、朝は自動車や自転車が割と多い。毎朝、その交差点の横断歩道には、私達を安全に渡らせてくださるおじさんがいる。おじさんは、自動車や自転車の通行に気を配りながら、「おはようございます。」や「いってらっしゃい。」などの声をかけてくださる。私達もあいさつを交わし、学校へ到着する。私は、学校までの約十分間のおかげで、今日もがんばろうという気分になれる。

また、下校の時も同じだ。自宅へ向かって歩いていると、庭の手入れをしているおじいさんやおばあさん、犬の散歩をしている人に出会うことがある。自然とあいさつを交わし、笑顔になる。

こうしてみると、私は、両親以外にも実に様々な世代の人達に見守られながら、日々生活できているのだと実感する。これが世代の絆なのだろうと、私は思う。この世代の絆は大切なものだし、これからも大切にしていきたい。見守りやあいさつなど、毎日欠かさずしてください。大切なことは、決して簡単なことではないはずで、感謝の気持ちを忘れてはならないと思う。

私もそういうことが自然にできる大人になりたい。そして、この気持ちを次の世代につないでいきたい。

優秀賞

思いやりをつないで

大田小学校 六年 長沢 健太

「お帰り。今日もみんな、元気に帰ってきたね。」

ぼくが小学校から帰る時、ぼくの家の近くに住んでいる見守り隊のおじさんが、いつも迎えに来てくれます。小学校からぼくの家までは、二キロメートルほどありますが、帰り道はおじさんと話しながら歩くので、あつという間に家に着きます。今、習っている勉強の話、休み時間に友達と遊んだ話、ぼくが習っているバスケットボールの話と、ぼくはいろいろな話をおじさんに話します。おじさんは、いつもにこにこしてぼくの話聞いてくれます。おじさんからは、ぼくのお母さんの小さい頃の話を教えてもらいます。お母さんもぼくのおじいちゃんも、見守り隊のおじさんも、ぼくと同じ小学校に通っていたので、当時の小学校の話をいろいろと聞くことができて、とても楽しいです。

通学路の途中には、田んぼで囲まれた一本道があります。春から夏にかけて、青々とした緑に囲まれたり、秋には黄金色に変化したりと、ぼくにとってお気に入りの道です。特に黄金色の稲穂が田んぼ一面に広がっている風景はとてもきれいです。その道の途中に、ぼくのおじいちゃんの田んぼもあります。

「おーい。健ちゃん、お帰り。」

と、田んぼの手入れをしているおじいちゃんが遠くから声をかけてくれて、手をふってくれます。ぼくは、うれしくなって、急いでおじいちゃんの田んぼまで走ります。おじいちゃんと、見守り隊のおじさんと、ぼくたち小学生で、話している時間は、とても楽しいです。

ぼくの家の庭で遊んでいると、となりの家の二才の男の子が遊びに来ます。一緒にボール遊びをしたり、砂遊びをしたりします。近所に住んでいる人たちは、ぼくが生まれた時から知っていてくれて、

「健ちゃん。大きくなったね。」

と、声をかけてくれます。ぼくは、とてもうれしい気持ちになります。そして、近所の小さい子ども達と遊んでいると、楽しくて、やさしく接したいと思います。

お母さんやおじいちゃんが育った伊達市で、ぼくも日々過ごしていく中で、やさしくて思いやりのある大人になりたいです。そして、将来、近所の子ども達や、おじいちゃん、おばあちゃんと楽しく話をしたり、やさしくしたり出来るようにしたいです。

ぼくは、来年には中学生になりますが、中学校からの帰り道で、小学生に会ったら、

「お帰り。今日もみんな元気だね。」

と声をかけたいと思います。ぼくが、してもらってうれしかったことは、身近な人たちにもしてあげたいからです。この思いが、伊達市全体に広がり、みんなにやさしく、思いやりのある人たちであふれたらいいと思います。

優良賞

地域活動を通して考えたつながり

伊達小学校 五年 池田 芽生

わたしの住んでいる地域では、年間を通して様々な活動を行っています。

活動の一つは、クリーンアップ作戦です。クリーンアップ作戦では、わたしたちの地域のごみ拾いを行います。各家庭から人が集まり、何班かに分かれて地域を回って拾います。ただし、コロナで集まることができなかった時は、自分の家の周りのごみを拾っていました。周りにごみがなくなると、とてもすがすがしい気持ちになります。月毎に、公園の草むしりもしています。草むしりも、班分けをして活動しています。夏の暑い時期は大変なので活動をひかえますが、公園をきれいにすることで使う人が利用しやすくなるので、とても大切な活動の一つです。その公園に花を植える活動もしています。花植え作業は、公園にある十個程度の植木ばちに三種類の花を組み合わせて植え付けます。今年の春の植え替えは、地域の子どもからお年よりまで集まって、ブルーサルビアやベコニア、メランポジウムの花を植えました。みんなで一しよの活動を行う中で、植え方を教えてもらったり、話をしたりしながら、地域の人たちと親しくなることができました。公園が花で華やかになったので、家族や友達と公園で遊ぶ機会も増えました。わたしは、自分がきれいにしたこの地域が、前よりもっと

好きになりました。園芸作業は、園芸りよう法と呼ばれ、身体的にも心理的にもよい効果があると言われていているそうです。公園に人の目と手が入ることで、防犯や治安改善にもつながるとのことです。これらの活動を続けることは、地域の環境を良くするだけでなく、新しいつながりや関係性を作ることができるとても大事なことで分かりました。わたしは、これからもっと伊達市のつながりを良くするためにどうすればよいかを考えてみました。一つ目は、各地域の美化活動に力を入れていくということです。美化活動のよさを知ったので、各地域で広がっていけばよいと思います。二つ目は、あいさつでいっぱいにするということです。わたしが学校に登校する時、地域の方がやさしくあいさつしてくれるので、とてもうれしいです。わたしも、地域の方にあいさつをたくさんしたいと思います。あいさつは、みんなの心をつなげると 생각합니다。三つ目は、地域の方と話を安心して住めるようにするということです。たとえば、回らん板を回す時に、ただよう便ポストに置いてくるだけでなく、チャイムを鳴らして声をかけたり、話をしたりすればよいと思います。一人暮らしの方もいるので、話をすれば安心するのではないのでしょうか。

このように、新しいつながりや関係性を作れることを自分にできることから始めていけば、住みやすく、すてきな伊達市になると思います。わたしも、地域の方たちとの気持ちのよいあいさつから一日をスタートします。

優良賞

私の町をつなぐためには

栗野小学校 六年 菊池 ひまり

私の学校には、栗野にまつわる民話や、歴史に関するお話を聞かせる語り部の方が来てくれています。私は、このお話を聞くのがとても楽しみです。なぜなら、栗野という地名の言い伝えや、近くにある庭渡神社の民話などを、おもしろく、そして分かりやすく話してくれるからです。語り部の方からお話を聞くまでは、自分の住んでいる町の歴史や文化に、あまり興味がありませんでした。しかし、今は違います。自分の町について、もっと知りたいと思うようになりました。

一学期に、私たち六年生は、総合の学習の時間に地域のボランティアの橘さんに案内していただいて、地域にある史跡をめぐるフィールドワークに出かけることになりました。

初めに向かったのは、塚原阿弥陀堂です。そこには金色に光る阿弥陀如来立像がまつられていました。また、昔の人々が阿弥陀堂で集う写真もありました。この場所が、地域の人にとって大切な場所だと思いました。

次に、向川原観音堂へ行きました。この観音堂は、高橋判官という人が建てたそうです。関ヶ原の戦いで破れた高橋判官は、先祖代々大切にしてきた観世音菩薩をかぶとの中に入れて、栗野まで逃れてきたのです。私は大阪から福島までの道のりを考えると、昔の人の大変な苦労を想像する

ことができました。昔の人々を想い、私は手を合わせてきました。

隣の建物では、毎年奉納されている獅子舞の獅子頭や衣装を見せていただきました。ここで行われる獅子舞は、五穀豊穡や子孫繁栄を願って奉納されるそうです。家族や大切な人が元気で幸せでいてほしいという願いは、何百年もずっと変わらないのだと思いました。

案内してくださった菊池さんから、この獅子舞の踊りを受け継ぐ人がいなくて困っているという話を聞きました。私は何百年も続いてきたこの踊りを受け継ぐ人がいないのは残念だと思い、家で家族にその話をしました。

私たち栗野小の六年生は、教えていただいた事をもとに、「劇・栗野村物語〜未来へつなぐ物語〜」を一から作り、学習発表会で発表しました。フィールドワークで訪れた中から、栗野地蔵尊、庭渡神社、獅子舞、お蚕様について劇にしました。私たちが学んだことを、沢山の人の知ってほしいという思いで発表しました。劇は大成を収めました。

この発表を見て、私の祖母や父も、初めて知ったことがあったと話していました。私たちの劇を見て栗野の事を知ってもらい、興味を持つきっかけになったらうれしいです。

私のふるさと、栗野。劇を通して私は、昔の人々が守り、受け継いだことで今の栗野があることに気づくことができました。まずは自分が住んでいる街に興味を持ち、地域の自然・歴史・文化について学んだり、意味を知ったりすることが、伝統を守り、未来へつないでいくために大切な一歩だと感じました。

優良賞

つないでいこうこの響き

保原小学校 五年 浦山 慶介

毎年、夏が近づくと、ある音が保原の街中に響きわたる。それは、それぞれの町内の若連が練習する太鼓の音である。この音を聞いたたび、ぼくは興奮をおさえることができない。なぜなら、ぼくの家族は、昔からこの太鼓の練習に参加しているからだ。家族みんな担当楽器がちがう。一番上の兄が小太鼓と大太鼓、二番目の兄とぼくが小太鼓、父がリズムの鉦、母が盆踊りの唄を担当している。

今年も練習会場へ行くと、ふだんなかなか会えない方々が笑顔で出迎え、いろいろ話しかけてくれた。やはり、ぼくにとってとても安心できる場所だ。相変わらず変わっていないなあ。ほっと胸をなでおろした。というのも、今年の盆踊りは、四年ぶりの開催なのだ。みんな首を長くして待っていたにちがいない。

いよいよ久しぶりに小太鼓にふれてみる。あれっ。どうしたんだっけ。あまりに久しぶりのことで、頭が混乱してしまった。すると、近くにいた地域の方が、

「タンタカタンタンタンとやるんだよ。」

と、ぼくの手を取って、優しく教えてくださった。ぼくが自信を持つてできるようにするまで、何度もあきらめず教えてくれたおかげで、ぼくもやっと思い出すことができた。

「ほら、できたじゃないか。うまいもんだ。」

練習すればするほど、どんどん楽しくなっていく。練習を重ねていくと、みんなで合わせても、ぴたと合って一つに聞こえるようになる。心の底まで響く音になっていく。太鼓の音がすごいエネルギーを発していることを、体感できるのだ。何ともいえない気持ちでいっぱいになる。やっぱり、太鼓は最高だ。

さあ、いよいよ本番、「保原サマーフェスティバル」がやってきた。会場には多くの人が集まっていた。ちゃんと練習通りできるかなと、不安と緊張で、心臓がばくばくしているのが自分でもよく分かった。そんなぼくのことを気づかっ

「大丈夫だよ。あんなに一生けん命練習してきたんだもの。落ち着いて。」と声をかけてくれる地域の方々。

「タンタカタンタンタン。」

演奏が始まると、後は無我夢中で、何があったか覚えていない。でも、盆踊りを踊っている方々、見てくださっている方々、その場にいた人たち全員が笑顔で楽しそうだったのを見て、ぼくも感動で胸がいっぱいになった。

それなのに、最近こうした地域での活動に参加する人が少なくなっているという。進学や就職で、伊達市を離れてしまう人も多い。単なる地元のイベントと思われるかもしれないが、ぼくは地域の人々をつなぐこの太鼓の文化を絶やしてはいけなく強く主張したい。ぼくも将来このふるさとを離れることがあるかもしれないけれど、この盆踊りの時期にはもどってくるなどして、このあったかい伝統をこれからもつないでいきたいと思います。

優良賞

世代を超えた絆

掛田小学校 五年 大橋 里玖

ぼくが住んでいる霊山町には、三五〇年も続く霊山太鼓がある。ぼくは小学一年生の時から太鼓を習っている。新型コロナウイルスの影響もあって、しばらく練習が休みだったが、今年は六月ごろから練習することができた。いつも練習している場所は、家の近くの秋葉神社である。

夏休みに入っすぐ、秋葉神社で盆踊り大会が開かれた。お母さんから「盆踊りと言っても、踊りはせず、みんなで太鼓をたたいて終わる予定だからね。」

と、聞いていた。だからぼくは、いつも一緒に練習している人たちと、太鼓をたたいて終わりなのだと思いますながら盆踊りに向かった。すると、いつも閉まっている神社の戸は外され、神社の中で、ぼくの知らないおじさんたちがたくさん集まっているのが見えた。中にいる人たちは、楽しそうに会話をしたり、ぼくたちの太鼓を見てくれていたりした。さらに、いつも練習の時にはいないおじさんが、盆歌を歌いに来てくれていた。盆踊りが終わる頃には、それまで神社の中で見ていた人たちも太鼓に参加し、楽しんでいた。ぼくは、それを見て、この盆踊りは、地域の人たちに支えられているのだと思った。

盆踊りが終わると、盆歌を唄っていたおじさんが、ぼくたち子どもや青

年団の方々のところへ来て、

「若い人たちは、若い人たちの力でこれからもり上げていってほしいです。ぼくらシルバー世代の力も協力していきますから。そして、ここをもっと活気づけていきましょう。」

と、話した。僕は笑顔で返事をした。

盆踊りの帰り、お母さんに、

「今日知らない人たちがたくさんいたね。」

と話すと、

「そうだね。今日来てくれていた人たちは、北町に住んでいて、太鼓をやったり、順番で神社を守ってきてくれたりした人たちなんだよ。」

と、教えてくれた。盆踊りに集まった人たちは、見に来てくれた人たちも含めると、赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃんまで、たくさん世代の方がいた。コロナでできなかった時期もあったけれど、地域のお祭りなどで近所の人同士が顔を合わせることを通して、つながりができていくのだと思った。これこそが「世代の絆と信頼」なのだと思う。もったこのような場が増えてほしいと思う。

上学年になり、たくさんの後輩が増えた。これからは、ぼくが習ったことを後輩に教えながら取り組み、地域のお祭りを守りながら、さらに強い絆を作っていきたい。

佳作

ぼくが守りたいもの

伊達東小学校 五年 斎藤 悠生

ぼくの家は和牛農家で、約二百頭の牛を飼育しています。曾祖父が牧場を始めて、祖父、父と受け継がれてきました。父で三代目で、

「悠生が四代目だよ。」

と祖父は言います。学校が休みの日には、ぼくも弟たちと手伝いに行きます。力仕事も多く大変ですが、祖父や父を見ると牛の表情を見てえさの量を変えたり、時には獣医として病気を治したりして、とてもあこがれています。

そんな中で、祖父が

「牧場を続けていけないかもしれない。」

と思ったことが、二度あったそうです。一度目はBSEという病気がはやった時、二度目は東日本大震災の時の原発事故による風評被害です。どちらも肉の価値が下がったことで牧場のけいえいを続ける事が、とても苦しかったそうです。放射のうによる風評被害は今でもわずかですが残っているようです。それを聞いてぼくもショックでした。でも祖父や父はどにかふんばって、より良い肉を作ろう、福島牛を盛り上げようと、続けてきたそうです。それを聞いて、ぼくもみんなが守ってきた牧場を大切にしていきたいと、強く思いました。

後継者不足も、大きな問題だそうです。父は昨年から「アグリバトンプロジェクト」という次世代をになう子供たちに農業の力を伝える活動に、参加しています。その中で、畜産をテーマにした本を作るためのインタビューを受けました。子供たちに少しでも農業の力を知ってもらって、職業の選択肢の一つになってももらえれば…と思ったからだそうです。父が他の農家さんと協力しているのを見て、ぼくも一緒に交流できるような仲間ができたらしーれしいと思いました。

そして、祖父、父、ぼくと受け継がれてきた夢があります。それは、「伊達地区のブランドを作りたい。そして、伊達地区のみんなにその肉を食べてもらいたい。」

ということですが、ぼくは、夏休みの課題で「日本の和牛」について調べました。福島牛の知名度は低く、和牛の消費量も全国で低い位置にいる事が分かりました。これを少しでも改ぜんしていくことも、これから考えていけないといけないと感じました。

曾祖父から代々受け継がれてきた牧場を守るために、ぼくができることはまだ少ないけれど、家族と協力して守っていききたいです。

そして、伊達市には桃やリンゴなどの果樹、あんぼ柿など、特産物がたくさんあります。伊達産の物を知って、みんなに伝えて、守っていききたいです。そうやって伊達市を盛り上げる一人になりたいです。

佳作

文化とのふれあい

伊達東小学校 六年 小宮 結衣

私たちが通う学校、伊達東小学校では毎年、ふるさとの良さみつけデーがあります。これは、全校生が各学年ごとに分かれて、伊達東小学校の周りを歩き、みんなでふるさとの良さについて学んだり、見つけたりする授業です。

私たち六年生は今年、福厳寺というお寺に行きました。お寺でお話をしてくださった方は一生けん命私たちに仏様のことや、地域とのつながりについて教えて下さいました。私たち、六年生は、みつけデーの後も二つの神社、お寺にお話を聞きに行きました。そのうちの一つ、水雲神社にお話を聞きに行った時、話してくれた方はもう、ずい分長生きしていて、

「もう、私の同級生はみんなお空に行ってしまった。私もそう長くない。」と話してくれました。その方は、もう長くはないからこそ、私たちに神社の文化を教え、地域の文化ともしっかりとふれあい、次の世代の人に文化をつないでほしいという気持ちがあるのだなと思いました。今の私たちは、地域の寺、神社の文化や出来事も全然分からないけれど、これまで六年間、お話を聞いた寺や神社などでは、話して下さる方の思いをつなげてほしいと思うから一生けん命伝えて下さるのだなと思います。また、私たちがお話を聞きに行っているのは先生方も地域の文化とのふれあいを高めて、

今のこと、昔のことについて知ってもらいたいからだと感じました。

学習発表会では、ほぼ毎年、ふるさとの良さみつけデーで学んだことを発表しています。発表会は毎年、保護者の方や、地域の方など大勢の方が集まります。なので、より多くの方に地域のことを伝えることができるチャンスです。今年の発表会、もしもみつけデーなどで学んだことを発表するなら、私は、これまでの立場とは逆に、今度は地域の文化とのふれあいを持ってほしいという気持ちが伝わるように演技して、私の気持ちを全校生に伝えたいです。

私はこれから、地域の文化にもっとふれあい、お祭りなどの昔からある行事に参加したいです。また、大好きな伊達東地区の文化のことをもっと沢山知りたいです。

佳作

ひいじいちゃんの運転免許

大田小学校 五年 加藤 桜子

私のひいじいちゃんは、今年、運転免許証を返納しました。ひいじいちゃんはもつと運転したがつていました。しかし、体が思うように動かず、事故などを起こしてしまったら大変だということになり、家族で話し合つて免許を返納することになりました。ひいじいちゃんも納得し、最後に食事会をすることになりました。私は両親が仕事で帰りがおそく、平日は毎日ひいじいちゃんの家に帰っています。学校から帰つて、ひいじいちゃんがいつも家にいてくれることはうれしいです。けれど、家族や近所の人達にめいわくをかけないように免許返納することにしたひいじいちゃんの悲しそうな顔を見ると、複雑な気持ちになりました。食事会の最後に、「何かあつたらよろしくな。」

と話し、食事会は終わりました。私は、ひいじいちゃんに大好きな運転をしてほしいと思います。しかし、何かあつたらと考えると、とても心配なので、免許を返納したのは正解だったと思います。

そこで、私がしたことが三つあります。

一つ目は、私が話し相手になり、ひいじいちゃんのことをはげましてあげました。ひいじいちゃんと話をすれば、運転ができなくても楽しい時間が過ごせるのではないかと思つたからです。

二つ目は、いっしょにすもうを見て、感想を話し合いました。私は、すもうのことはルール以外、一切分かりません。けれど、ひいじいちゃんの楽しそうな顔は、今でも忘れられません。

三つ目は、手伝いです。これは主にひいばあちゃんの手伝いをしました。ひいじいちゃんの力仕事も手伝いました。手伝つた後の二人の喜ぶ顔を見てみると、私もとてもうれしい気持ちになりました。この三つをやっていると、ひいじいちゃんは笑顔でいることが多くなりました。

最近のひいじいちゃんとひいばあちゃんは出かけることは減つたけれども、いつも変わらず元気で笑顔あふれる二人を見ると、私は心が温かくなります。病院に行くときや買い物に行くときは、タクシーを使つたり、いっしょにすんでいるおばあちゃんの車に乗せてもらつたりしています。そして、おばあちゃんが忙しいとき、ひいじいちゃんは時々、「ほばらまちなかタクシー」を使っています。料金も安く、利用しやすいからです。そして伊達市には、「ほばらまちなかタクシー」以外にもいろいろなお年寄りへのサービスがあることが、調べてみて分かりました。お年寄りへのいろいろなサービスを上手に活用することで、ひいじいちゃんたちがいつでも元気に過ごせるのではないかと思っています。ひいじいちゃんたちが元気だと、私も安心して学校に通うことができます。私は、さらにお年寄りに優しい伊達市になってほしいです。

佳作

祭りでつなぐ世代の絆

月館学園小学校 六年 大河内 瑞希

私が住んでいる下手渡地区は、毎年、八雲神社のお祭りをしています。神社でおはらいをしてもらった後は、子ども会でおみこしに乗り、太鼓をたたいて下手渡中をまわります。夏祭りにしか会えない友達にも会えるので、いつも楽しみにしていました。感染症のえいきょうで、四年前からお祭りができずにいましたが今年はいよいよ、お祭りができることになりました。一・二年生の時、私は小太鼓をたたいていましたが、今年は大太鼓にチャレンジすることになりました。祭りの二週間前から、毎週火曜日と木曜日、七時から八時半まで太鼓の練習です。太鼓を教えてくださいの、私のおじいちゃんです。

「もう少し速くたたいても大丈夫だよ。」

おじいちゃんは教えるのが上手で、すぐに覚えることができました。おじいちゃんは、大太鼓だけでなく、小太鼓も教えてくれたので、妹の小太鼓ももつと上手になりました。途中から、自転車に乗ったおじさんもやってきて、やさしく教えてくれました。初めて会ったので最初は緊張しましたが、とても親しみやすくて、いい人だなあと思いました。

七月十六日、ついにお祭りの日がやってきました。練習はたくさんしたけれど、おみこしに乗ってたくのは、足場が動くので難しく、苦戦しま

した。大太鼓一人、小太鼓一人。そして、周りの大人の大きなかけ声。音を聞き取るにはすごく集中しなければいけません。リズムが分からなくなり、あせりました。その時、

「ド、ドン、ド、ドン。」

近くでかけ声をしていたお父さんが口でリズムを教えてくれたので、上手にたたくことができました。お父さんも、小さいころから八雲神社の太鼓をたたいていたので、私が困っているのが分かったのかもしれない。（小さいころ経験したことが、今も役立っているんだ。）私もがんばろうと思い、かけ声に負けないように、力強くたたきました。

太鼓をたたき終わった時、おみこしをいっしょに引っ張っていた友達のお父さんに、

「おつかれさま。ありがとう。」

と言われました。無事にたたき終わってよかったと安心しました。

四年間中止になっていた八雲神社のお祭り。太鼓を教えてくださいのおじいちゃん。自転車のおじさん、リズムを教えてくださいのお父さん……。いろいろな人のつながりで、今年のお祭りを成功させることができました。一緒に練習したり、話したりしていると、昔から行われていたことが、今も続いていることが分かり、うれしくなりました。世代の絆をつないでいくためには、八雲神社のお祭りのように、一緒に活動することが大切だと思います。下手渡には、うどん作りやおじぞう様のお祭りなど、様々なイベントがあります。私はこれからも積極的に参加していきたいと思います。



中学生の部

最優秀賞

育ててもらった町

月館学園中学校 三年 高木 梨央南

私は、幼い頃から月館の人々の温かさに触れて育ってきました。

私が幼稚園児だった頃、母と祖父は仕事に行っているため、家には祖母がいました。幼稚園から帰ってくると、毎日、祖母に遊んでもらいました。そして、私の楽しみのひとつだったのが、祖母が通っていた健康教室です。月館総合支所で週に三回行われている運動教室で、私は毎回祖母について行って、教室に通っている方々や先生に遊んでもらっていました。部屋いっぱい敷かれた広いマット、目新しい運動器具、幼い私にとっては最高の遊び場でした。今思えば、運動の邪魔になっていたときもあったと思います。でも、温かく受け入れてくれたこと、話しかけてくれたこと、全力で遊んでくれたこと、嬉しい記憶しかありません。小学校入学とともに健康教室には行かなくなりましたが、今でも当時遊んでくださったいた方から「大きくなったね。」と声をかけていただくことがあります。その度に、当時は気付かなかった、育った環境のありがたさが身にしみ、温かい気持ちになります。

小学生になってからは「おはなしの会」や地区のクリスマス会、太鼓の教室、市内のスイミングスクールなど、違ったところで地域の方との交流が増えました。しかし、今はなくなってしまったイベントや教室もあり、寂しい気持ちです。この月館でたくさんの人々の温かさに育てられた私

は今、ふるさとのために何ができるでしょうか。

月館学園中学校の生徒会活動では、全校生が四班編成で「ピカピカ運動」というボランティア活動を行っています。

ふれあい班は学童クラブに行って子供たちと遊び、お手紙班は地域のお年寄りに年賀状や暑中見舞いを書きます。プレゼント班は地域の事業所に七夕やクリスマスの手作りオーナメントを贈り、清掃班はお世話になっている施設の清掃活動をしています。活動を通して、地域の方々との交流を深め、地域の活性化に繋がってほしいという思いで活動が続いています。伊達市内にはこの活動を取り入れてくださっている中学校もあり、月館学園から始まったこの活動が広がっていることを嬉しく思っています。

私たちがこの月館という温かい町に育ててもらったように、将来若い世代を育てるのは私たちです。まだ見守っていただいている立場ですが、少しずつでもふるさとへの恩返しをしていくのが、私たち中学生の役目だと思っています。今はまだ、私たちに出来ることは限りあるかもしれませんが、でもその意識が、将来自分の住む町の温かさになるのではないのでしょうか。

優秀賞

これからの世代を繋げるために

伊達中学校 二年 数又 南

私が住んでいる伊達市には、小さい子どもからお年寄りまでさまざまな年代の人が暮らしている。伊達市は自然豊かで、地域の人は優しい人ばかりだ。しかし最近私は、少子高齢化が進んでいると感じる時がある。今年のテーマ「つなぎましょう。世代の絆とたしかな信頼を」というのは、私たち若い世代で自然や伝統をつないでいかなければならないということだと思う。私たちがこの歴史ある伊達市をつないでいかなかったらどうなることだろう。伊達市をこわしたくない。良い印象をもってもらえるように、私は少しでも協力していきたいと思う。少子高齢化関係なく、もつともつと良い伊達市にしていきたい。何ができるのか私は考えてみた。

一つ目は、積極的に行事に参加することだ。伊達町には、長岡天王祭という古くから行われているお祭りがある。地域の人とコミュニケーションがとれる場として大切な場だと思う。しかし近年、子どもの参加が少なくなっている。私は毎年、先輩方に笛や太鼓を教えてもらいながら楽しく参加している。でも今度は私がみんなに優しく教えてあげる側だ。そして、小学生などにこの楽しさを感じてもらいたい。もつと祭りを盛り上げたい。私はこれからもずっと参加しようと思う。この伝統を未来につないでいくために。絶やさないように。みんなで参加すると、これまで以上に明

るく迫力のあるお祭りになると思う。また、団結力があり、さらに良い伊達市になると思う。

二つ目は、町のクリーン活動を増やすことだ。私は歩いていると道端によくゴミが落ちているのを見かける。タバコの吸い殻だったり、ペットボトル、おカしの食べた後のゴミだったり様々だ。まずは、一人一人が「ポイ捨てをしない」と意識して行動するだけでも町はもつときれいになると思う。そしてよりよい町にするためにクリーン活動を増やしてみんなでこの自然豊かな伊達市を守っていくべきだ。

三つ目は挨拶をすることだ。私は挨拶が生活の中で一番大切だと思う。小学生の時「先大見笑」という言葉を教わった。「先」相手より先に、「大」大きな声で、「見」相手を見て、「笑」笑顔で。このあいさつで、他の人を良い気持ちにさせ、信頼感を生み出すのだ。私も毎朝意識してあいさつをしている。この言葉で朝から清々しい気持ちになり、一日がんばろうと思える。だから、あいさつは絶対にしてほしい。みんながあいさつをしつかりすれば伊達市がもつと良くなると思う。

私は伊達市が大好きだ。そのためにできることを自ら考え行動していきたい。誰かがやってくれるから自分はやらないと思うのではなく一人一人がやるからこそこの地域はさらに良くなるのではないか。これから人も人との関わりを大事にし活気のある伊達市にしたい。

優秀賞

伊達市民の思いを胸に心を紡ぐ

霊山中学校 三年 森藤 音羽

私の住んでいる伊達市は、町の自然環境を良くする人や、食事に困っている人を助けてくれる、そんな優しい人々が住んでいる誇りある町です。

しかし、伊達市をもっと良くしたいと思う人は多くても、その思いを実現するという人は少ない、これが現状です。そこで私は、伊達市が市民の協力とともにどうしたら良くなるのかを考えました。

私の思う伊達市の一番の魅力は、自然が豊かで、美味しい特産物が数多く作られているところです。ですが、年々農家が減少し、働き手が不足しています。その一つの原因として若い人々が仕事を求め都会へ行き、後継者がいなくなることが考えられます。若い人が伊達市を離れることで多くの問題が生じます。例えば、若い人が都会に住むことで、伊達市で一人暮らしをする人が増え、その多くが高齢者となり生活が困難になってしまいます。そこで、その問題を少しでも解決するために行われている活動が、私の中学校の近くでたびたび見かけるよりそい食堂です。JA農協のボランティアさんの協力のもと、一人暮らしの高齢者や、家庭の事情で食事がとれない子供の助けとして食べ物を提供しています。私のおばちゃんもその一人です。来る人來

る人皆んなが食事を提供され、笑顔で帰る姿に、とてもやりがいを感じるのとこのことでした。また、道路脇の花壇を綺麗にしてくれる地域のおじさんや、町の中心には子供食堂という無料で食事をさせてくれる場所があります。実際に、私も友達と食堂に行きましたが、時間で終わってしまったけれども、豚汁だけでも優しい対応と美味しい味が心がとても温まりました。

私はこうした取り組みが伊達市の人々を安心させ、世代関係なく信頼を築けるんだなと感動しました。

そして、私の考えとして、この町の活性化のため二つの提案があります。まず一つ目は、イベントを月に二回ほど開催させ、皆さんと深い絆を結びたいと思いました。内容は、子供でもお年寄りでも、楽しく遊べる、かるたやすごろくなどさまざまです。二つ目は、少子化で閉校となる学校を昔懐かしい娯楽施設に変えられたらいいと思っています。自分の通った学校が取り壊されたら悲しいし、何より思い出のつまった校舎で昔のクラスメイトと話せたら素敵だなと思いました。そんな誰でも気軽に参加し、訪れることができる温かい雰囲気を作ることができたらと思います。

今の伊達市を良くするためには気持ちだけでなく、一人一人の意欲ある行動が必要です。ゴミを拾い、ポイ捨てをしない、こんな小さな取り組みが大きな幸せとなって返ってきます。現代の幸せを未来につなぐため、伊達市一体で協力したいです。そして、伊達市をさらに誇れる私の最高のふるさとしたいです。

優良賞

健幸都市伊達市をめざして

梁川中学校 一年 鈴木 里依咲

私の住む伊達市には、約五六〇〇〇人の人が暮らしています。全国的にも深刻な課題となっている高齢化問題ですが、伊達市も高齢者数は毎年増加しており、高齢化率は、約三五%を超えています。それが伊達市の課題ともなっています。

しかし、私が見る伊達市のお年寄りには、いつもすてきな笑顔で、とても健康に過ごしているように感じます。私が小学生のころ、学校の帰り道に、なんだか楽しそうな笑い声と「がんばれ」というかけ声が聞こえてきた時がありました。それは、集会所にいらしたおばあさん達でした。そこでは、体操教室が行われていました。

「おかえり。一緒にやってみっかい。」と、声をかけてくれたことがあります。参加されていた方々の元気な声と明るい笑顔を今でも覚えています。

どうして、この様に、街全体から元氣あふれる声がたくさん聞かれるのでしょうか。

伊達市では、少子高齢化社会と人口減少社会が進む中、市民ひとりひとりが健康で幸せな生活を送るため、「健幸都市」の実現を目指し、伊達市役所内に「健幸都市づくり課」があります。ホームページを見

てみると、「健幸都市」の取り組みがたくさん掲載されています。参加者同士の交流も大きな目的の一つであり、顔を合わせて、楽しみながら体を動かし、体力づくりを行うのです。また、「だてな健幸ウォーク」や「伊達ももの里マラソン大会」が開催されます。今年は新型コロナウイルス感染拡大防止により行われていなかったトライアスロンも開催されることを知りました。伊達市民だけでなく、全国から参加される方もおり、伊達市を発信するとてもよい機会だと思います。同時に、この活気ある伊達市で生活しているということに誇りを感じています。

私の祖母も、今年度より、「健幸クラブ」の会員となり、週二回ほど、仲良しの友達と体力づくりを頑張っています。祖母はダイエットのためと言っていますが、たくさん汗をかき、友達とはげまし合って、取り組む時間が充実していて、家事や仕事を頑張る活力となっているのではないのでしょうか。そして、祖母は、妹に、自分がチャレンジしたストレッチを嬉しそうに教えるのです。妹も楽しそうに笑い、二人共笑顔になります。そして、私まで笑顔になるのです。

「すこやか」とは、元気で健康なこと、心身が満たされていること。小さな子どもからお年寄りまで笑顔がつながり、幸せが広がる、そんな生活が続いてほしいと思います。伊達市が取り組む健康であることそのものが幸せであり、地域社会全体を明るく暮らしやすくしていく事という願いを感じること、改めて「健幸都市」の実現のため、心と体の幸せを大切にしていこうと思います。

優良賞

盆踊りと大條太鼓

梁川中学校 三年 佐々木 美空

友達から「小さな盆踊りなんだけど、太鼓たたいてみない」と誘われました。余りにも突然だったので驚きましたが、興味の方が勝って「やってみたい」と即答してしまいました。私が住んでいる地域は富野です。友達は大枝です。正式には八月十三日の大枝の「令和五年度盆踊り大会」という名称で四年ぶりに開催されるこの祭りでの太鼓のお誘いでした。

母は「他の地域に住んでいるし、素人が興味本位で参加し、皆さんに迷惑をかけてしまうのでは？」と心配していましたが、どうしてもやってみたい気持ちが抑えきれず、母を説得して太鼓の練習に参加する事に決めました。日程がつまっていたので練習は二日間だけでしたが、それもたった二時間しかありませんでした。それでも盆踊りの実行委員会の皆さんの指導もあり、なんとか一番簡単な演奏は覚えることができました。

盆踊り大会当日は台風の影響もあり、開催は無理かとも思いましたが、夕方には雨も上がり無事四年ぶりの盆踊り大会が始まりました。私達は六時に集合し、揃いの法被を着てやぐらに上がり、少し早かったけれど太鼓を叩き始めました。七時から九時ぐらいまで皆と交代し

ながら演奏しました。太鼓を叩きながら大きな声で掛け声を上げるなど色んな人達が叩きにきてくれたりして更に盛り上がり、緊張していましたが笑顔で楽しむ事が出来ました。盆踊りには欠かせない仮装大会も始まりました。集落ごとにそれぞれ工夫をして一人一人が心から楽しんで笑顔満開です。私の太鼓をたたく手にも力が入ります。踊り手と太鼓の音が一体となり、私もやっと大枝地区の皆さんに溶け込めた気がしました。たった二日間の練習しかしていない私を受け入れていただいた大枝の皆さん、ありがとうございました。

今回指導をいただいた大條太鼓の由来は、奥州の守護伊達氏ゆかりの大條孫三郎宗行公を始祖とし、以後約二百年にわたって大枝村に居住した大條家の名にちなんで命名されたそうです。伊達市全体では霊山太鼓が有名ですが、各地域にも、何百年も前から継承されてきた伝統ある太鼓が沢山あります。今回短い期間でしたが、大枝の盆踊り大会に参加し、伝統ある大條太鼓に触れることができ、とても貴重な体験をさせていただきました。

大人達から子供達へ、先輩から後輩へと、これからも伝統を大切に守り、地域の発展に貢献できるよう、日々考えながら過ごしていこうと思います。二学期からは何かと忙しくなります。中学生生活最後の夏休み、最高の思い出ができました。

優良賞

めざせ！夢実現都市伊達市

月舘学園中学校 一年 関根 明莉

私の中学校には水泳部がありません。でも、私は今年の中体連の水泳競技に出場することができました。これは、多くの人が、私の夢にたくさん力を貸してくださったおかげです。

現在、吹奏楽部にも入部している私は、放課後、吹奏楽部の練習をします。六時ごろに練習を終了し、まっすぐ車でクラブへ向かい、ひたすら泳ぎます。家に帰宅するのは九時半ごろです。それから宿題と入浴と明日の準備をして、ベッドに入ったと思ったら、もう朝です。土日は、朝七時から練習があります。正直、結構しんどいと思っています。大好きだったはずの水泳を嫌いになりそうな時もありました。でも、泳ぎます。やっぱり好きだから。そして、私の夢を多くの人が応援してくれているのを、感じているからです。私の夢は「オリンピックに出場してメダルをあらそうトップスイマーになること」です。

今年から中体連の制度が変わり、所属するスイミングクラブからも出場することができるようになりました。しかし、そのためには、クラブの理解と協力が必要です。だから、恐る恐る、中体連の大会に出場したいことを相談した私に、クラブのコーチが

「明莉が出られるよう考えているよ。」

と言ってくくださった時、息が止まりそうなくらい嬉しかったです。中体

連の大会には出られない。高校のインターハイを目指して練習を続けよう、とあきらめていた私は、憧れの大会に出場できる期待に心が震えました。クラブのコーチたちが、中体連の出場にむけた手続きや、大会の日も引率などをしてくださったことに、とても感謝しています。

月舘学園中学校では、他の部と同じように壮行会をしてくださいました。うれしく誇らしい気持ちで胸がいっぱいになりました。クラブからの出場だとしても、月舘学園中の代表という誇りは決して忘れないぞと、心が奮い立った、あの感動を忘れることは出来ません。大会当日も、一人のために、校長先生が応援に駆けつけてくださり、うれしさと恥ずかしさに、緊張でお腹が痛くなるほどでした。

結果は、百メートルバタフライで、目標だった県大会に出場することができました。クラブや学校、応援してくれた家族や同級生、沢山の人に支えられた最高の成績です。

どんなに困難な夢だろうと、私の夢を信じ支え、繋ぐとしてくれる大勢の人がいる伊達市で、毎日、夢と真剣に向き合えることが幸せです。感謝の気持ちを忘れず、あきらめずに全力で努力を続けていきたいです。そして、いつかは私も、伊達市で誰かの夢を支える一人になりたいと思います。そうやって、互いに夢を支え合うことで信頼をつなげ、絆を育むことで、世代の枠を越えた市民の絆も強くなると信じています。

めざせ！夢実現都市伊達市！

優良賞

より良い伊達市にするために

月舘学園中学校 二年 齋藤 大智

私は、絆という言葉を書き換えました。すると「人間同士の、切ることの出来ない繋がり」と書かれていました。そこで、伊達市にはどんな世代の絆があるか考えました。

まず、最初に思いついたのは、祖父母の世代との絆です。

現在、伊達市は高齢化が進んでいます。お年寄りは、体が思うように動けなくなり、自分で出来ることがだんだんと限られてくる世代です。そこで、私たち中学生のような若い世代や、私たちの親の世代が、お年寄りの世代からさまざまなものを受け継いだり、役割を補ったりすることが大切だと思います。

若い世代は、色々情報を集めることが得意です。そしてお年寄りの世代は、伝統的な技術や豊富な知恵を持っています。この二つの長所を合わせることである分野で活躍できると考えました。

例えば、お祭りの時に打ちあげる花火があります。若い世代が新しいアイデアをたくさん出し、技術を持っている世代の人達がそれを実現することで、見る人がより楽しむことができます。世代の垣根を越えた協力ができる、地域が盛り上がると思います。これは工芸品の制作や販売などにも言えることだと思います。

また、私の学校では、地域の方々が学校の草むしりや消毒などをしてくださっています。私たちがお世話になっていることをきちんと知ったうえで、感謝の気持ちを伝えることも、世代の絆と言えると思います。

私の母が、

「周りの大人がしっかりしなくてはならないね。子供はちゃんと見てくれるね。」

とよく言います。私も共感しています。この考え方が、伊達市民すべての人に広まってほしいです。このように、三世代が連携、協力し、より良い地域づくりや、その基礎を固めることが、今の伊達市に必要なと思いました。

私は七月に、職場体験で伊達市スポーツ振興公社に行きました。そこでパークゴルフ場の整備をさせていただきました。そこで働いている方は、「パークゴルフは子供から、お年寄りまで楽しめるスポーツなんだよ。」とおっしゃっていました。子供からお年寄りまで、幅広い世代で楽しめるようなイベントや施設を、もっと増やすことができたらいと思います。子供とお年寄りが一緒に楽しめることが少ないので、もっとこのような機会を増やすことで、世代間の絆が強くなり、活力が溢れている地域づくりを進めて行けるのではないかと思います。

私はこれらのことが一つ一つ実現していくことがすべてではなく、基礎を固めることが大事だと思います。だからこそ世代の垣根を越えて協力し、さまざまなことに挑戦することが大切だと思います。

佳作

小さな行動から

伊達中学校 一年 佐藤 恵

私は最近の生活の中で、地域の子供とお年寄りの信頼関係が薄くなっていたり、上辺だけの付き合いになっていたりすると感じる事が多くなりました。その原因は、子供とお年寄りが関わる時間が少なくなっていることにあると思います。関わる時間が減ることによってお互いの価値観が理解できず、否定的な気持ちになってしまうのです。私の家族は祖母の家と近いところに住んでいます、私の姉は祖母にたいして苦手意識をもっているのか、近くに住んでいる割に関係が薄くなっています。私も、地域のお年寄りとあまり関係をもってきませんでした。私が人見知りということもあり、話しかける勇気がなかなか出なかったからです。これまではいさつをされても、恥ずかしくてうまく返すことが出来ませんでした。それでも、地域の人との関わりが薄くなっている今、私にできることが何なのかを考え、行動に移したいと思っています。

祖母は、私が知らないことをたくさん知っていて、いつも教えてくれます。人生の生き方、近くにある未来や遠い未来についてなど。私よりたくさん生きてきた祖母の話は人生経験が豊富でとても勉強になります。昔ながらの遊びを教えてください、小川に連れて行ってくださいました。小さい頃、よく遊んでもらった思い出があります。今でも野菜や料

理など、たくさんのおすそ分けをもらっています。祖母からだけでなく、地域の人からもいろいろなものをもらってきました。おすそ分けは人の心の温かさに気付かせてくれるものなんだなと感じています。

私は明るい雰囲気のある社会を作るため、まずは誰にでも笑顔であいさつすることを心がけていきたいと思っています。家族や祖母と一緒に始められたらなとも思っています。なぜなら、あいさつは誰でも簡単に出来るからです。黙ってすれ違ってしまったら認識はそのままだけど、あいさつをすればお互いに前向きで明るい気持ちになれるはずです。親しみを感じることもできるようになると思いました。また「今日も暑いですね。」や「雪かき、大変ですね。」といったちょっとした言葉を付け加えてみることもいいなと思いました。

会話が出来るようになれば、今まで聞けなかったことや疑問に思っていたことが聞けるようになります。関わり合う時間も増えていきます。たくさんさんの会話が生まれ、多くの時間を一緒に過ごすことによって、相手に関心をもつようになり、理解しやすくなるのではないかと思います。私は、全員が誰にでも信頼関係を築ける、活気ある地域を小さな行動からつくっていききたいと思っています。

佳作

地域活動で心を一つに

梁川中学校 二年 八巻 碧

私が活気に満ちた町で健やかに生活するために、今自分を取り組んでいることは、地域のイベントなどに進んで参加していることです。今年は二つのお祭りのイベントに参加しました。

一つ目は、まちの駅やながわで開催された夏祭りです。この夏祭りでは、さまざまなステージが開かれており、とてもにぎやかになっていました。ですが、参加者のほとんどが子ども達の方が多く、屋台の方に夢中になっており、ステージの方には見向きもしませんでした。そこで私は一緒にいた友達と共に少しでも地域活動に貢献しようと手拍子をしました。すると、ステージで演奏していた方と目が合い、笑顔になってくれました。そこで私は地域の活動に少しでも参加するだけで相手のことを支援し、笑顔にさせ、自分も楽しくなれるということを知り、これからも参加したいと思いました。

二つ目は、梁川駅前で開催された、伊達のふる里夏まつりです。このお祭りは四〇台以上の数のキッチンカーが並んだ盛大なお祭りでした。ステージでは和太鼓やアイドルなどのショーがありました。今回のステージはまちの駅やながわのお祭りのときよりもとても大きく、観客はたくさんいましたが前と同じように応援をしました。今回は大勢で一つにな

って応援をしたので前より倍の楽しさがありました。特に一番応援したのはアイドルのマジカルバルーンYesさんのステージです。友達が本気になって応援しているのを見て、自分も負けていけないなと思ったので気持ちを込めて応援しました。それはとても楽しく、みんなとの一体感というのを感じられてとても良い経験になりました。知らない人も一緒に伊達のふる里夏祭りを活気づけられたので良かったです。

次に、これから行っていくと思ったことです。それは、地域でのお祭りのステージで応援することはもちろんのこと、地区のお掃除作業にも参加して、もっと幅広い地域での活動にも貢献していきたいと思いました。そうすることによって、みんなと一つになって地域を活気づけられると思ったからです。

私はこの二つの夏祭りでの経験を経て、地域での活動に参加することはその地域を活気づけることができるということがわかりました。そして、ステージなどでは少人数だろうと応援することによって気持ちが一丸となるため、自分も相手も楽しくなり、活気づけ、健やかに生活できる町ができると思いました。

佳作

地域の盛り上げ役として

松陽中学校 三年 佐藤 空道

私の住んでいる保原町柱田の台方部には「柱田大聖文殊菩薩」という寺院がある。地元では通称「文殊様」と呼ばれていて知恵をつかさどる仏さま「文殊菩薩」を祀っている伊達市内では唯一の文殊尊だ。

「文殊様」では毎年私の大好きな二大イベントが開催される。

一つ目は「春の例大祭」だ。

毎年三月初めの日曜日に開催されることになっている。ちょうどその日は保原町を代表する奇祭「つつこ引き祭り」の開催日と重なっているため、文殊様のお祭りを知る人はあまり多くないかもしれないが、お祭りは多くの人たちにぎわう。毎年知恵を授かりにお年寄りから小さな子供たちがお参りをする。祭りでは合格祈願などの祈祷を受ける場所が設けられていたり、地域の人たちが運営する露店が出店されている。この露店が文殊様らしく、ノートや鉛筆、ペンや消しゴムなど勉強に使用するものが主に販売されている。露店の中の地域のおじさんたちは、

「絶対買ってあげよ、頭よぐなっから。」

と言って、文房具をおすすめしてくる。小さい頃は仕方がなく買っていたが、今は何となくではあるがお参りをしたことや文房具を買ったことで、学習に勇気が持てるような気がしている。地域のおじさんたちの露店で

の声掛けのおかげというのもしもあるかもしれない。私たちが文殊様によって勇気づけられていると感じるイベントである。

もう一つのイベントは「文殊様の盆踊り」である。ちょうどお盆の時期に開催されるため台方部のたくさんの人たちや帰省している親子連れなどたくさんの方が社の周りで盆踊りをして盛り上がる。その社の上で太鼓をたたくのが私たち台方部の子供たちの役目になっている。私は小学四年生くらいからたたいっている。この文殊様の盆踊りのためだけに地域のおじさん達が熱心に私たちに太鼓のたたき方を指導する。指導が始まるのは毎年夏休みに入ってからになっている。初めは全く知らなかったおじさん達だったが太鼓を通じて仲良くなり、今では道で会えば大きな挨拶を交わすほどの関係である。

しかし、残念ながら新型コロナウイルス感染症が蔓延してからというもの、このお盆踊りは開催されておらず、今年もコロナが五類へ移行したにも関わらず、開催されないことが決まった。この先もこのまま盆踊りが開催されなくなるのではないかととても心配している。地域のお年寄りやおじさん・おばさん、学生や小さな子供たちがみんなが待ち望んでいるこの文殊様の二大イベントを絶対に絶やすことのないよう、私たちからでも積極的に参加して、自ら活気が出るように盛り上げていきたいと思う。それが自分たちのできる役目だと思う。

佳作

高齢者体験で意識するようになったこと

霊山中学校 一年 齋藤 楽歩

私は、今年の六月、福祉体験に参加し、高齢者の体験をしました。

高齢者体験では、高齢者疑似体験セットを体につけ行動する人と、その横でサポートをする人とで、二人一組になり行いました。高齢者疑似体験セットには、視野を狭くするゴーグルや耳を聞きとりにくくするヘッドホン、手や足の関節を曲げにくくするサポーターなどがありました。

はじめに、体験セットの着用方法やサポートをする人のポイントを教えていただきました。ポイントにはつえの反対側からサポートすることや周りの段差を体験者に伝えることなどがありました。

次に、高齢者体験をしました。始めは、サポート側だったのでポイントを抑えながら階段の場所もあったので体験者が落ちないよう意識して上りました。次に体験者側になりました。体験中一番大変だったことは、関節が曲げにくいことです。関節が曲げにくいので歩くことでさえ大変でした。階段はさらに大変で、すこし怖さもありました。あと靴ひもがほどけた時結ぶため、しゃがむことができず前屈のようにして結びました。他にも大変なことは多く、視野が狭いので回りが見えにくいことや近くじやないと話が聞こえないことがありました。

私は、高齢者体験をして、高齢者の大変さを知ることができたと少し思

いました。

ここ伊達市霊山町には、お年寄りの方が多く散歩しています。私が自転車で遊びに行くとほぼ毎回のように散歩中のお年寄りの方とすれちがいます。いままで私は自転車のスピードを落とし、ゆっくりにしてあいさつをしてすれちがうことがほとんどでしたが、高齢者体験の後はすれちがう時に自転車を降りるよう心がけ、あいさつも前より少し大きな声で言うように変えました。

このように、だれもお年寄りをリスペクトし、多少ゆっくりでも待つことなどができて、お年寄りが無理なく、落ち着いて暮らせる伊達市ができると、お年寄りが安心安全に暮らせるいい市ができると私は思います。

講 評

審査委員長 二瓶 洋允（元学校教育課長）

伊達市の市民憲章作文コンクールの七年目は、「つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を」という課題でした。それには補足として（世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。）という説明が添えられています。それらを小・中学生がどのように受け止め、どのように内容を具体化し、文章にまとめているかが審査のポイントでした。

今年度は、市内の小・中学校の協力のもと、七百三点の作文が寄せられました。その中から学校推薦のあった三十五点の作品が最終審査に残りました。三人の審査委員により選考が行われ、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が、次のように決まりました。

*

最優秀賞に輝いたのは、保原小学校六年の小林璃久さんの「笑顔でつながる伊達なまち」と月舘学園中学校三年の高木梨央南さんの「育ててもらった町」の二つの作品でした。小林さんは、「だて市政だより」で知った「こども食堂」を実際に訪れ、市内で最初に子ども食堂を立ち上げた佐藤さんの思いを深く理解し、人間関係が希薄な今、地域の人と人とのふれ合

いやつながりの大切さを訴えています。中学生の高木さんは、幼稚園や小学生の時、地域の方々に温かく見守られて育ってきたことに気付き、学生の今、生徒会でボランティア活動を行い、地域の子供たちやお年寄り、事業所や地域の方々とのつながりを広げ、地域の活性化につなげようとしています。二つの作品とも、文章の展開が明確で、具体例を通して分かりやすくまとめています。

優秀賞に選ばれたのは四人の作品です。小学生部門は、伊達小学校六年の小林愛理さんの「つないでいきたい『大切な絆』」と大田小学校六年の長沢健太さんの「思いやりをつないで」の二作品です。中学生部門は、伊達中学校二年の数又南さんの「これからの世代を繋げるために」と霊山中学校三年の森藤音羽さんの「伊達市民の思いを胸に心を紡ぐ」の二作品です。小林さんは、登下校中に見守ってくれる近隣の人たちの声かけやあいさつなどをていねいに取り上げ、次の世代につないでいこうと結んでいます。長沢さんは、見守り隊のおじさんやおじいちゃんとの話の楽しさ、近所の子供たちとの遊びなどを取り上げ、やさしくおもいやりのある人たちであふれたらいいなと述べています。数又さんは、若い世代で自然や伝統をつないでいこうと、行事への積極的な参加、クリーン活動を増やすこと、挨拶の三つの点からまとめ、人との関わりを大事に活気ある伊達市にしたいと結んでいます。森藤さんは、「よりよい食堂」など安心や信頼関係を築く場を知り、子どもやお年寄りが楽しく遊べるイベントの開催や閉校した校舎を娯楽施設に活用するなどの提案をしています。

優良賞に選ばれたのは八人の作品です。小学生部門は、伊達小学校五年の池田芽生さんの「地域活動を通して考えたつながり」、栗野小学校六年の菊池ひまりさんの「私の町をつなぐためには」、保原小学校五年の浦山慶介さんの「つないでいこうこの響き」、掛田小学校五年の大橋里玖さんの「世代を超えた絆」の四作品です。池田さんは、クリーンアップ作戦や園芸活動を通して、子どもからお年寄りまで新しいつながりや関係性を作ることの大切さを訴えています。菊池さんは、地域の史跡を巡るフィールドワーク、学習発表会での劇栗野村物語の発表をもとに、地域の歴史や文化、伝統を学び理解することが、未来へつなぐ一歩だとまとめました。浦山さんは、盆踊りの太鼓の練習、サマーフェスティバルの様子から、地域の人々をつなぐ太鼓の文化を絶やしてはいけなさと述べています。大橋さんは、霊山太鼓の練習や秋葉神社での盆踊りを通して、近所の人同士で顔を合わせつなぐことが「世代の絆と信頼」だとまとめています。

中学生部門は、梁川中学校一年の鈴木里依咲さんの「健幸都市伊達市をめざして」、梁川中学校三年の佐々木美空さんの「盆踊りと大條太鼓」、月舘学園中学校一年の関根明莉さんの「めざせ！夢実現都市伊達市」、月舘学園中学校二年の齋藤大智さんの「より良い伊達市にするために」の四つの作品です。鈴木さんは、伊達市が「健幸都市」実現のため取り組んでいることが、地域社会全体を明るく暮らしやすくしていると述べています。佐々木さんは友達から大枝地区の盆踊りに大條太鼓の打ち手として誘わ

れ参加した体験を取り上げ、大人から子供へ、先輩から後輩へと伝統をつないでいきたいと述べています。関根さんは、水泳を通して多くの人が応援してくれているのを感じ、互いに夢を支え合うことで信頼や絆を育むとまとめています。齋藤さんは、若い世代と親の世代、お年寄りの世代がそれぞれの役割を補っていくことの大切さを考え、パークゴルフ場での職場体験を通して感じた世代を超えた絆の基礎を固めることが大事だとまとめています。

佳作には八つの作品が選ばれました。小学生部門は、伊達東小学校五年の斎藤悠生さんの「ぼくが守りたいもの」、伊達東小学校六年の小宮結衣さんの「文化とのふれあい」、大田小学校五年の加藤桜子さんの「ひいじいちゃんの運転免許」、月舘学園小学校六年の大河内瑞希さんの「祭りをつなぐ世代の絆」という四作品です。中学生部門は、伊達中学校一年の佐藤恵さんの「小さな行動から」、梁川中学校二年の八巻碧さんの「地域活動で心を一つに」、松陽中学校三年の佐藤空道さんの「地域の盛り上げ役として」、霊山中学校一年の齋藤楽歩さんの「高齢者体験で意識するようになったこと」の四作品です。いずれも、題材は異なりますが、地域の人々との関わりやつなかりに着目し、大切にしていこうという作品でした。最終審査に残った作品は、伊達市や地域の人々への思いにあふれるものばかりでした。いろいろな視点から題材を見つめ、世代間のつながりや絆を育み、確かな信頼を築いていこうとする強い思いが伝わってきました。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一 つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

一 そだてましょう

支えあいと思いやりの気持ちを

一 きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

一 めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを

市民憲章の解説

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「くましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。

一 まもりましょう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

一 つなぎましょう 世代の絆とたしかな信頼を

世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましょう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましょう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましょう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域も人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和6年1月